

総合科目「キャリア論」を振り返って

経済学部 山ノ内 敏 隆

How to run the subject : “Your Career”

Toshitaka YAMANOUCHI (Faculty of Economics)

Most Japanese students study very hard for an entrance examination but after a matriculation they do not study hard. They say that Japanese University is a leisure facility. So, Japanese University must stimulate them to study hard. This subject “How to make your career” has two purposes. At first, they understand various careers, think their career and then they recognize why they must study hard in a university. At the second most Japanese students are not good writers. This subject aims that they become good writers. This subject invites 7 guest speakers. They lectured their careers. Students write their report about a guestspeaker and then I check the reports.

Key word: Career

一 キャリア論開講の目的

キャリア論は、総合科目の講義であり、前期2単位授業である。その目的は下記の点にある。

大学生の多くが、大学入学までは真剣に勉学に励むが、入学後に急速に勉学意欲を無くし、大学が一種のレジャーランドになっているという指摘はかなり古くからなされている。この現象は、大学がエリート大学からマス大学へと変貌するとともにより顕著になってきたように思われる。その責任を学生だけに求めることは、問題を解決することにはならない。大学側も学生に勉学へのインセンティブを高めることが求められているように思われる。

また、日本の雇用システムが現在大きく変容しつつあり、従来のいわゆる「就社」という形での就職が文字通りの「就職」へと変わりつつある。このような意味から、学生が大学での勉学と将来の職業経歴を「キャリア論」の講義を通して自ら考える機会を与えることを第一の目的としている。

第二の目的は、文章力を高めることを目的としている。学外からの多くのゲストスピーカーが毎年講義あるいは講演を行っている。多くのケースは、講義ある

いは講演を聞き流すだけで終わっている。そのため、貴重な講演等が学生に十分理解されないで終わっているケースが多々ある。本講義は、ゲストスピーカーの講義後にその概要と自分の感想を書かせ、提出することを義務づけている。提出されたレポートを題材に文章の書き方を講義している。このことにより、学生は人の話を正確に理解する能力を伸ばすとともに、文章能力を伸張する機会を得ることになる。

二 授業計画

本講義は、下記のゲストスピーカーをお呼びし、講義をしていただき、各講義に関して要旨と感想をレポートとして提出させる。このレポートを山ノ内が評価し、その後の授業で文章の書き方の資料として活用する。

平成9年度のゲストスピーカーは次のとおりである。

今田 幸子	日本労働研究機構	副統括研究員
和田 龍幸	経済団体連合会	常務理事 事務局長
後藤 司郎	済生会新潟第二病院	院長
大田 芳枝	労働省婦人局長	
北村 幸久	文部省	生涯学習振興課長
斎藤 政行	シネ・ウィンドウ	代表

片桐 寿代 ピアニスト

この講義がどのような効果があったかを確定することは現在まだ困難であるが、学生から提出されたレポートを以下に紹介するにより、評価にかえたい。学生のレポートは、講義終了後の40～50分間にレポートを書かせ、提出させたものである。なお、以下に掲載するレポートに関しては山ノ内は修正等を行っておらず、原文のままである。また、これらのレポートが最も優れたレポートであるわけではありません。

今田幸子先生「日本人のキャリア」に対するレポート
理系 一年生

要旨

日本人のキャリアはアメリカのキャリアとは違い、若い新規の大卒を好みそして他の国より明らかに早い時期から就職活動を始める。そして、学校を媒体として就職活動をしている割合が、日本は非常に多いため、安定したキャリアスタートを切ることはできるけれど、選択の範囲がとてもせまいためにそのぶん早くからの若い人の失業率も高い。それに比べ、アメリカは知人や家族を媒体とした就職、イギリスは知人、家族、職安、学校など全般的なものを媒体とした就職活動をしている。

日本の企業は企業内で道を外れるとそのダメージが大きいうえに、やめると不利になり、だからといって「石の上にも3年」とがまんしてやめずに続けていっても、結局だめだということもある。だから、やはり今、選択の多様性が日本に求められている。就職活動をする際に、自分にプラスになる就職をするためにいかに情報をより多くのアンテナをたてて収束していくか、手抜きをせずにより自主的に、積極的になっていくことができるかが大切である。だから、就職活動において試行錯誤していくことは必要になっていく。

講義を聞いて、女性の就職率が今非常に低くなっているが、やはりそこは自分たちが就職に対してよりポジティブになれるか、どれだけ情報をより多く収集していけるかにもかかっていると思う。先生がおっしゃっていた「日本も少しずつ色々な形の就職の仕方をする企業が増えてきている。」という言葉から日本では今まではやりにくかった、個人の意志を出すということ

も可能になるということがいえると思う。

私は大学に入れば就職できているところがあったが、今日の講義を聴いて、私が考えていた「就職」は今までの日本の企業が行っていた何色にも染まっていない新規の大卒を集めて、企業色にしてしまう「就職」をあたりまえのこととして捕らえていたからかもしれないと思った。しかし、就職とは自分の考え、意志とやりたいことを自分で把握して、会社でもアクティブになれることが大切なのだ、今日の講義を聞いて思った。そして、私は今まで「キャリア」と言えば「キャリアウーマン」しか頭になかった。しかし、先生は「キャリアとは生涯を通じて経験する職業的な地位・役割の連鎖である」とおっしゃって、自分が恥ずかしくなった。「連鎖的」と言う言葉が印象的であった。私は4年後か6年後かいつになるか分からないが就職したいと思っている。もっとこの講義を通じてだけでなく、個人的にも「キャリア」について勉強しなければならなかった。自分の無知も改めて感じてしまった。

和田龍幸先生「魅力ある日本の創造とこれからの社会が求める人材」に対するレポート

文系 一年生

概要

今まで日本的経営ということで、終身(=長期)雇用、年功序列、企業内組合という3つの大きな特徴があった。しかし、現在は社会の変化に対応してこれらの経営のあり方も変化している。

例えば、終身雇用はリストラなどによって崩壊し、メリットであった人材育成や愛社精神を培うこと、自分に合った仕事をやり安心して生活できるといったようなことは少なくなったが、デメリットととして挙げられていた、自分に合わなかつたらということや選択性の問題は解消されつつある。

また、雇用ということで現在に求められている人材はどういったものか、ということでは1、他に言われたからではなく、自分で考えて行動できる主体性のある人、2、様々な変化を敏感に感じ取れる感性のある人、3、組織内で生活していく上での協調性のある人、4、様々な変化に対して柔軟に対応できる柔軟性のあ

る人、5、リテラシーのある人ということである。さらにリテラシー（＝基礎知識）については現代のリテラシーは1.2か国語以上を話せる、情報処理（＝分析）能力がある、コミュニケーション能力があるということで広く情報集ができるための能力が基本になっているといえ、これは21世紀のリテラシーということもできる。

このような能力が養われるためにはそれなりの教育が必要になるわけであるが、現代の学校教育には多くの問題がある。学校教育の水準は、真ん中に合わせた教育を行っている。そのために標準より上だったり下だったりする人々には適切な教育が行われないのである。結果として、才能を十分に発揮できる機会を与えられないまま終わってしまうという問題もでてくる。

また、偏差値によって格付けされてしまうという問題もある。偏差値が高いと偉かったり、得をするということがある。しかし、これについては教育を受ける機会が必ずしも均等でなく、例えば、家庭の所得によって塾に行けたり、行けなかったりするという背景もあることが原因となっている。

このようなさまざまな問題があることが指摘され、その中で企業の採用の仕方も変わってきている。まず、指定校制からオープン化への変化であるが、これはすでに七割程度の企業が採用している。また、その会社に合わなかったらという問題を解消するために人材明確化ということで初めから「こんな人が欲しい」ということを明らかにした上で採用を行うということもある。また、実際に会社に入ってやっていけるかどうか確かめる「ジョブインターン」ということも行われ、制度化の動きにある。他にも、採用時期を春と秋にすることや採用を新卒者だけでなく中途退職者にまで広げるという動きも広まり、採用の仕方も多様化している。

これからは産業構造も一極集中型よりもより多極化の方向にある。その中で規制緩和によるビジネスチャンスの広がり、新産業の開拓などにより企業の活性化がおこる。それによって求められる人材というものも変化していくが、柔軟に対応していくためには教育機関のあり方や教育の内容を正していくことが必要なのである。

感想

社会の変化とともに人材に何を求めるかが変わってきた過程がよくわかったと思う。しかし、より柔軟で主体的な人材を求めるのとはうらはらに、会社教育によってその可能性や性格が失われるのではないかとという心配があったと思った。

また、リテラシーについては自分の現状をみつめるとまだまだ学ぶべき、得るべきことが多かった。

後藤司郎先生 済生会新潟第二病院院長「医療人とキャリア」レポート

理系 一年生

概要

医療経済という概念は、第二次世界大戦後、1940年代後半にアメリカから導入された。全ての人に均質な医療を提供するために、全ての医療費を国が負担するつまり国民は保険に入り、その保険で医療費をまかなうというやり方である。しかし、政策環境の変化と医療技術の向上による医療費の増加、国家の赤字の増加のために医療費を抑制する必要が出てきた。そこで国民が医療費の2割を負担することになった。医療費の抑制策はいろいろとあったのだが、日本では個人負担の方法で落ち着いた。このことに関して後藤氏は、昭和56年時点で国は医療原理についてもっとディスカッションすべきであったと述べている。日本は平均寿命が男77歳、女83.5歳と長寿社会ではあるが、21世紀にはその老人医療費が今の40倍になるともいわれている。また、イギリスでは病院は全て国営で国民は地区のドクターにかかり、必要があれば指定された専門病院にかかることが決められており、自分で受ける医療サービスを選べない。しかも、医師は国家公務員なので金銭的には効率的な反面、関係者の意欲が乏しく、質が悪い。質を落とさずに安い医療費で医療を行うというのはとても難しいことである。

私たち消費者には選択の自由は与えられているわけだが、それは医療に関してもいえることである。自由に病院を選べるのはもちろんのことであるが、最近では自分の受ける治療も自分で選ぼうという考えが広まりつつある。それが、インフォームドコンセントである。良く末期ガンであることを本人に告げるかどうか、といったことで話題にあげられる。しかし、本来の目

的は患者の人権や医師の尊重である。カルテの開示や詳しい説明によって患者に病状を正確に把握してもらい、その上で数種類の治療法の中から本人（又は家族）に選択させる、つまりは情報公開と自己決定によってインフォームドコンセントは行われる。しかし、病状を知らせることが、かえって患者にとって不幸な結果を招くこともあり、導入には医師の慎重な判断が求められると後藤氏は言う。

後藤氏は自分の人生のキャリアとして医療にたずさわることを選んだ。そして自らのキャリア選びに必要なのは「自分をいかす」ことと「自分が何を要求されているかを見抜く」ことであると感じたそうだ。胃ガン告示のインフォームドコンセントを例にあげるとする。患者の病名は胃潰瘍なのに本人が自分で胃ガンなのではないかと疑っていた場合、求められる答えは「患者の病名が胃潰瘍であることの完璧な説明」ではなく、「患者がガンなのかそうでないのか」である。患者は「患者のためには自分のことはかえりみない」というような赤ひげ的な医師の理想像を持っていて、医師はそれに近づいていく努力をし続けなければならないのである。後藤氏は、現代について「理念のもとで努力し続けなければならない時代」と評している。

医師も含め、世の中に様々な専門職があり私たち大学に入る目的の一つに専門職のための勉強や資格獲得もあげられる。しかし、私たち学生は専門だけを勉強しても専門家やその道のプロには決してなれない。スペシャリストになるためには、一般教養の上に専門を乗せたような、T字型人間でなければならない。大学生活の忙しい4年間に良書をたくさん読んで専門以外の知識も豊かにしておくべきだという言葉で後藤氏は締めくくった。

太田芳枝先生「日本女性のキャリア形成の現状と今後の展望」

文系 一年生

要旨

昭和61年に男女雇用機会均等法が施行された。女性の雇用に関する現状としては、まず労働力率はグラフにすると結婚又は出産のために退職し、その後パート

などで再び仕事をするというM字型になっている。

（欧米先進国では男女同じになってきており、日本も最近Mの字の真ん中のくぼみが浅くなってきている。）それから、男性のみの募集の職種コースがある企業が、特に技術系（4～5割）に多くあることや女性管理職の少なさを見ても、変化してはきているが、なかなか女性に男性と同様の機会が与えられない状況は簡単には変えられないことが分かる。資料から企業側は職業意識など女性の方に要因があると考え、女性労働者側は機会を与えようとする企業に問題があると考えている。といった認識のずれも大きな問題だといえる。

今回の国会で男女雇用機会均等法は改正された。それによって募集及び採用、配置及び昇進における女性差別についての従来の努力義務規定が禁止規定化された。その他には時間外労働や深夜業の女子のみの保護規定がなくなったこと、機会均等調停委員会による調停が双方が同意しなくとも片方の側のみで受けることができるようになったことなどがある。

感想

社会学の授業でもジェンダーという観点から今回の講義のような女性の雇用についての問題にふれていたもので、非常に興味を持って聞くことができた。太田先生は女性の立場から多くを話して下さったので、私もまったく同じ考えだと言う話がしばしばあったということも興味深い事だと思って聞いた理由かもしれない。

男性・企業側の意識改革はもちろんのこと、女性側の意識にも問題があったのではないかとこのことを今回強く感じた。そしてその意識を生み出した家庭教育、学校教育、社会教育の力もまた感じた。

また今日の講義を男性のみなさんはどのように受け止めているのか、ということにも興味がある。

齊藤正行先生「私のキャリア」

理系 一年生

要旨

シネ・ウインドウの代表、齊藤正行氏は一九四九年に新潟市で生まれた。新潟高校に入るが、授業には出ず図書館に入り浸っていた。その時に初めて、県出身の作家、坂口安吾の書いた「風博士」と「吹雪物語」という本を読む。高校生だった齊藤氏は、主人公不明

の、分裂気味ともいえる文体に頭を混乱させられたという。これが斉藤氏と坂口安吾との出会いであった。

作家坂口安吾は、一九〇六年新潟県で生まれた。十代の頃からノイローゼにかかり、非合法的な薬、喧嘩などさまざまなことをし、四十代の頃には東大の精神病院に入っていたこともある。とてもスキャンダラスな人ではあったが、原稿用紙に書く字は「女学生に清書をさせたようだ」と評されるほどきれいであった。斉藤氏は坂口安吾の作品は分裂気味であるが、今読み返してみると日常に近い心地よさがあるという。

斉藤氏は明治大学に入るが、学費滞納で除籍になってしまう。その当時は、全国どこでも学生運動が盛んで活動するのが普通で、活動しない人はノンポリとよばれ、むしろ恥ずかしいときえされていた。しかし、斉藤氏は熱いエネルギーが世の中を変え、動かすことができるのだといっても、若者が活動するには、年寄りや大人の動かす経済が必ずからむと考えたからだ。そして、斉藤氏は婦人服の会社で、デザイナーの下で働き始める。そのデザイナーは「自分がつくった服が売れないならば、それは良い物売る力のない他の人々や仕組みが悪いのだ」というアメリカ的考えの持ち主であった。その人の元でアメリカ合理主義を学び、Produceに興味を持ち始める。Producerというのは芸術と経済をつなぐ役目であると斉藤氏は認識している。

娘の小学校入学のために全てをやめて斉藤氏は東京から新潟へと戻ってくる。職業を何も考えずにいたため、しばらくは無職の日々が続く。その間には親戚に追い出されそうになったり、友人に説教されたあげく大喧嘩になったこともある。その間、斉藤氏が考えていたのは、どんな職に就くかではなく、昔読んで感銘をうけた《坂口安吾をやる》ということであった。

そして昭和60年、新潟市民映画館シネ・ウィンドウを設立する。資金5,000万円は、市民から一口一万円ずつを集めてまかなわれた。この事業は失敗すると自殺に追い込まれかねない、大変危険なかけであった。しかし、周囲の予想に反して、12年間存続している。中国の友人に失敗したときの相談をしたり、友人の弁護士に相談したりという苦勞もあったそうだ。

感想

斉藤氏の話しておられた、若者のエネルギーが世の中を動かすなんて嘘だ、という話は、初めて聞く考え方だったのでとても驚かされた。また、「昔の人がハングリーだったのは物に対してであり、精神にたいしてではない」とか「精神は誰でもハングリーなものだ」というのは、大変心強い言葉であった。

片桐寿代先生「私のキャリア」

理系 一年生

片桐氏は、新潟大学教育学部特別音楽科を経て、大学院を卒業した。家の事情で新潟を離れることができず、音楽を勉強する最も良い方法が新大入学であった。当時、女性で大学進学なのだから当然教師になるのだろうと周囲の人には思われていた。しかし、本人は教育実習に四回行っても教師になりたいとは全く思わなかったそうだ。好きなピアノを弾く時間を少しでも増やしたくて、大学院に進むが専門である教育心理学も好きなピアノもあまりできなかった。しかし、ドイツ語の先生と知り合い、そのついで片桐氏は一年間の予定でドイツ留学をすることになる。ピアノの勉強のためというよりはむしろ、ただ興味があつてちょっと行ってみるという感じで行ったそうだ。ドイツでは先生の元で子どもの面倒を見る代わりに無料で下宿させてもらった。最初のうちは家からはあまり出ないでドイツ語の勉強をしたり、ピアノの練習をしていた。そのうちに、片桐氏はベルリン自由大学を受験することになった。ベルリンには自由大、工科大そして芸術大と主に三大学あるが、大学制度が日本とは違い、入試があるのは芸術大だけだった。夏学期、冬学期のそれぞれの前に年二回の新入生募集があり、しかもピアノの演奏をする試験の前に必ず先生にコンタクトをとっておく必要があるのだ。

一度目の受験では先生にコンタクトをとらず失敗、その後ロシア人の先生にコンタクトをとってレッスンをして晴れて入学することになった。芸術大のピアノ科は留学生が多く、日本人もいたのでドイツ語はなかなか上達しなくなった。単位は日本の大学で取得したものが認められるので、ピアノの練習のためだけに学校に通い、待ち時間を通して友達ができたりした。プロを目指す人も多く、熱心に練習していた。ドイツで

は文化に対しての受け入れ体制がしっかりしており、オペラに学割がきいたり、一流の芸術にたくさん親しめる。片桐氏は、ピアノが上達するにはピアノにかじりついてばかりいるのではなく、外から様々な刺激を受けることが必要だと感じたそうだ。

学生ビザで入国すると一年のうち二か月間は働くことができる。片桐氏は、ウェイトレスやピアノの先生などのアルバイトをした。そのなかでも、日本語補習校の先生というのが印象に残った。ドイツに住む日本人の子供に、日本と同じレベルに国語や算数を教えるのだ。小学校一年生の前にフォアシューレというのがあって、そこで平仮名を教えたりもする。一クラス十二～三人の担任をしてみても、片桐氏は「児童数が少なければ先生もやりがいのある仕事だ」と初めて感じたそうだ。また、同僚の先生にドイツの会社情勢を習ったりもした。

片桐氏のベルリン滞在中に、ベルリンの壁崩壊が起こった。それまでは、東ドイツと西ドイツの間には高い壁があり、川の通っている所も東ドイツ側には壁があった。また、それを越えようとすると兵隊に射殺される。壁のところには殺された人の十字架がかざってある。そのスライドを見たが、十字架というと映画などで見るお墓の十字架を思い浮かべるので、スライドに写る板きれを十字架の形にくり抜いて名前を書いたものを見た時、ショックだった。壁が崩壊した直後は、東ドイツの人が西ドイツにたくさんやってきて、街は大混雑したそうだ。地元の方は、ドイツは元々小国の集合体で地方色が強いので、壁によって分かれることも統一のことも生活に対して影響はないと考えていた。

ドイツの大学は、自分で卒業する時期（在学年数）を決められる。ベルリンに三年間いて、「ここに一生住む気にはなれない」と感じた片桐氏は、卒業と帰国を決意した。卒業試験はピアノリサイタルだった。一人一時間の持ち時間で、お客さんも呼び、先生が審査する。できが良いと楽屋に人が来てくれて、それはとても感動的だそうだ。

帰国後、逆ホームシックになり、一度ベルリンに戻ったりしたが、生徒をとってピアノのレッスンを始めたり、人脈を作りつつ、演奏などの仕事もした。今では教えるという仕事の、生徒が生き生きと真剣にピアノ

に向かう姿が見られることに魅力を感じている。良い人間関係を作る、信頼関係が大切だと片桐氏はつくづく実感している。

北村幸久先生「生涯学習とキャリアデベロップメント」

文系 一年生

生涯学習が注目されて、関心をもたれるようになったのは、1965年にユネスコにより「第3回成人教育促進国際委員会」が組織されてからである。1973年にはOECDが「リカレント教育—生涯学習のための戦略—」を提唱し、日本国内でも中央教育審議会や臨時教育審議会などで教育制度の改革についての答申が行われました。

生涯学習とは、私たちが生涯を通じて、各人が自発的意志に基づき、行う、動機のはっきりした学習活動を総合的に見たものである。つまり、生涯学習の中には学校教育や家庭教育、職業訓練などだけではなく、スポーツ活動や文化活動、趣味、ボランティア活動といったものも含まれるのである。生涯学習のこれからの社会での必要性は、まず学歴偏重社会の弊害の是正の役割が挙げられる。また、社会の産業構造の変化や情報化などの社会の急激な変化に伴う学習の必要がある。

現在、行政は学習、生涯学習というものを考えるときには、学習性の視点に立って、学習の内容を広くとらえていき、学習者の主体性を最重要視している。そして、生涯学習がより社会に受け入れられるためにも、大学の存在というのも大きく、最近では社会人が大学で学べるように夜間に開かれる大学や大学院が見られるようになってきた。しかし、まだまだそうした大学、大学院の数は少ないようである。その他にも地域の公民館や青少年教育施設などで学級や講座が開設されてきている。

生涯学習はただ学校の要因だけでなく、企業の評価や雇用慣行などの社会的要因や学習者の要因により規定されている。

これからのグローバル社会に対応していく人材、つまり主体的に行動し、自己責任の観念に富んだ創造性あふれる人材を企業は求めている。そうしたことから生涯学習と企業と行政のあり方というものはこれからの社会にとって重要である。

コメント

一度職業に就いてしまうと、もう大学などで学びたくても学べない今までの社会の現状では、これからの社会の変化に対応していけないと思う。これからの社会を築き上げていく人々には自律性、多様性が求められている。それらを個々人に確立していくためにも、

多くの経験や人々の交流が必要であるのではないか。今後、生涯学習が広く社会に普及していくためにも、教育機関の充実、地域の施設での公開講座の開設数の増大などとともに、それらを受講しようとする人々がさらに増えていくことを期待したい。